

〈随筆〉理想の「背づら」

中川 豊

今からおよそ十五年前、かつて図書館勤務をしていた頃の話である。

図書館用語の「書架整理」とは、排架の乱れを元に戻すとともに、書架の奥に入り込んだ図書を手前に引っぱりだして「背づら」を揃えて、少しでも利用者に図書を選びやすい状態にする作業である。これらとともに合わせて行いたいのが、**葉**の収納である。葉は短冊状のタイプのもので紐状で図書に付随しているものがあり、ともに葉という。機能はもちろん、どこまで読んだかの目印だ。ここで取り上げるのは後者の紐状の葉の方である。

通常、葉の紐は、図書の高さにその三分の一から半分を加えたぐらいの長さである。書架整理をしている最中、この葉が図書の背に垂れている辞書や百科事典が私は気になる。私はレファレンス担当であった。レファ本は百科事典や国語辞書など厚手の図書が多い。中には二本色違いの葉が付けられている場合もある。それが背文字に掛かって垂れていると見苦しいのである。そこで私は一念発起してレファレンス室にある図書、およそ一万冊の葉をしまう決意をした。図書を開いて、葉を折り返して図書の中にしまい込んで閉じて書架に戻す。つまり「抜いて、開いて、しまつて、パタン」。この繰り返しだ。もつとも葉が出ていなくなったり、そもそも葉が付いていない図書もあるので、実際に作業の対象となるのは、一万冊の半分以下であった。図書の排列は、通常日本十進分類法の分類番

号と図書記号によって最上段左端から右へと排列されていく。最上段が埋まれば一段下がって同様に左から右へと続く。私は0類から葉が出ている本を順次「抜いて、開いて、しまつて、パタン」という単純作業をはじめた。業務の合間を縫つて、一日一、二時間程度この作業に時間を捧げることを日課としたのだ。幸い四、五日ほどでレファ本の葉という葉はすべて私の手によって収納されていった。作業を終えた書架を斜め手前から眺めると、背が手前に引き寄せられて、一糸乱れることなく本達がきちんと並んでいる。壮観なのである。まるで閲兵式の兵士のように整然としている。私は惚れ惚れとしていた。今思うとこういうのを自己満足というのであろう。

味を占めた私はレファレンス室に留まらず、開架の一般書架にまで進出しようと企てた。図書館の蔵書は、全体でおよそ三十五万冊。そのうち開架分は、閉架・団体貸出し用・レファ本などを差し引いておよそ十四万冊。よし、やつてやろうじゃないか。開架の葉も全部しまつて、図書館全体を美しくするのだ。私は一人燃えていた。レファレンス対応と図書館だよりの執筆や郷土資料の目録作成・展示など、必要最低限の業務をこなすと私は「抜いて、開いて、しまつて、パタン」の呪文を心中で唱えつつ、開架へと取りかかった。

レファレンス室のように順調にはいかないだろうことは予想していた。なぜなら開架の図書は貸出し可能で、一端しまつても葉が垂れて書架に返却される可能性が十分考えられるからだ。一日にせいぜい三連、四連（書架を数える助数詞は「連」）ぐらいいしか進まなかつたが、それでも図書たちは私の手によって手前に引き出され、葉はしまわれて、書架上で生き生きと自身の存在を主張しているように見えた。作業を終えた書架と、終えてない隣の書架を比較すると、やはり見栄えは歴然としている。靴磨き同様、努力の成果がたちまちに現れるのが嬉しい。しかし、である。問題は9類であつた。9類は小説、随筆など文学のジャンルで、どの公立図書館でも蔵書量が多い上、貸出返却の循環が著しい。従つて葉が出たまま戻ってくるのも、また多い。前日しまい終えたはずの書架には、多く

の本が返却されて葉がたくさん垂れている。するとともに戻つての作業となり、遅々として進まない。私は返本をしている仲間に協力を求めたい衝動にかき立てられた。しかし、そういう訳にはいかない。「抜いて、開いて、しまつて、パタン」は、私の主観的な感情がきっかけで始めた単純作業である。組織の中で命じられたわけではない。そもそも他の職員は、私のこの作業を決して好意的に見ていなかったようである。ある職員はしばらく私の作業を後ろで眺めていた。が、まもなく立ち去った。「しばらく」は、私が何を行っているかを会得するまでの時間である。何をしているのか「しばらく」観察するのだが、私が葉をしまい込んでいるのだと合点すると静かに立ち去るのである。私は心のどこかで「お手伝いしましょうか？」という声が掛かるのを密かに期待していたが、「しばらく」すると誰もが無言で私の背後から立ち去った。「何してるの」という素朴な疑問の声や、逆に「そんなことしなくてもいいよ」という否定的な声も聞かれなかった。それは富者が貧者に対して寡黙で寛大であろうとする態度に等しい。半ば呆れられていたのかもしれない。

しかし、私は来る日も来る日も、前の書架に戻つては葉をしまい、また進んでは戻つてしまつてを繰り返していた。ときには前々日にしまつた書架の葉をしまうのが精一杯で、ちつとも進まない日もあった。そんな行きつ戻りつを繰り返しているうちに私はギブアップした。人ひとりの力では、どうにもならないことがある。そんな言葉が身に浸みたのがこの経験からである。一般書架の葉をしまうことは大変なことだぞ、そんなことは百も承知だった。だが、経験しないと理解できないタチの私は、失敗してようやく合点した。

教訓。「開架の葉すべてをしまい、維持するのは一人では無理」。

結局、図書の葉をしまい、それを維持するためには組織的に行わなければならないのだ。受付カウンターで図書が返却された際、落書き切り取り等のチェックとともに葉は収納するという運営方針を職員全員が共有して実行し

ない限り、栞の出していない書架は維持できない。それでも栞は出るのです、そこは書架整理で補う。こうして、はじめて栞が収納された美しい書架の状態が維持できる。品川区だったか首都圏の図書館だったと記憶するが、一切栞が垂れていない書架に遭遇したことがある。おそらく館全体としての共通理解のもとに維持されているのであろう。

栞が収納されて手前に引き出されている「背づら」は美しい、と思う。その気持ちに変わりはない。利用者が図書館で図書を選ぶ。その前提の環境として、私はそういう美意識を堅持している図書館を理想とする。